近所の農家さん

上野（うえの） 和代（かずよ）さん
（日の出地区）

収穫した落花生を干す上野さん

上野さんは日の出町で養豚を営む家庭で育った。畜産業が、時代の変化とともに衰退の兆しが見えると、父親が畑を買い足し、野菜の栽培を始めた。特に熱心だったのが母親で、野菜づくりを楽しんでいたが、収穫した野菜が食べきれないほどになり、やがて直売所の会員となり、野菜を販売するようになった。

当時、上野さんは別の仕事をしており、休日に畑仕事を手伝っていた。そんな折、母親が体調を崩したことをきっかけに、本格的に農業に従事するようになった。

現在は自宅で夫の仕事の経理を担いながら、45アールの畑で多彩な野菜を育て、日の出町ふれあい農畜産物直売所に出荷している。

栽培品目は、ジャガイモ、ネギ、落花生、ホウレンソウ、小松菜など多岐に渡り、金時草、ネギニラ、ノビルなど珍しい野菜も育てている。

上野さんは、少量多品目で栽培する理由を、「作る人が少なくなった野菜や、収穫後に手間のかかる野菜でも、楽しみにしてくださるお客様のために、時期になれば少しでも店頭に並ぶようにしている」と話す。

直売所については、「スーパーにはない規格外や訳ありの野菜を求めて来てくれる方もいる。同じ野菜でも生産者によって品種や量、値段などさまざまで、それがお客様の“選ぶ楽しさ”につながっていると思う」と魅力を話す。

また、畑の一角で約100本のブルーベリーを栽培している。これは、かつて日の出町が特産化を目指して配布した苗を大切に育ててきたもの。上野さんのブルーベリーは小粒で、ジャムにするとアントシアニンの鮮やかな青紫色が美しく出ると評判で、出荷の依頼も多い。直売所で販売する他、町の食品加工施設「肝要（かんよう）の里（さと）」に出荷し、地元産ブルーベリージャムやソースとして人気商品となっている。

来年は東京都が開発した世界初の房取りができる新品種「TB-02」の栽培にも挑戦する。

秋冬の主力は、秋じゃがの「ベニアカリ」と「にしゆたか」で、春じゃがに比べて栽培が難しく、生産者が減ってきている。上野さんのお気に入りは「ベニアカリ」で皮が赤く中は黄色、ねっとりとした食感が特徴。毎年栽培し、種芋を自家採取することで母の代からの味を守り続けてきた。「ベニアカリ」は、毎年11月中旬から1月頃まで直売所に出荷する。

上野さんは、「手が回らなくなるので、できるだけ育てやすい品種を選んでいるが、苗が余るとつい植えすぎてしまう。おいしい野菜を求めて直売所に足を運んでくださるお客様のために、これからも農業を続けていきたい」と穏やかに語った。

新品種のブルーベリー

写真
（公財）東京都農林水産振興財団
農林総合研究センター

ベニアカリの花とジャガイモ

ネギニラ